

本会元理事長 佐藤長先生を偲ぶ



本会の元理事長、

佐藤長先生は、平成

二〇年一月六日、肺

炎により逝去された。

享年九三歳。ここに

謹んで哀悼の意を捧

げる。

先生は、大正三年、

北海道旭川市でお生まれになり、仙台一中、山形高校を経て、昭和一〇年、京都帝国大学文学部にご入学、昭和一四年、史学科東洋史学専攻を卒業された。引き続き大学院に入学され、文学部助手をも勤められたが、昭和一七年、文部省在外研究員として北京に留学され、チベット語や中国語を学ばれた。終戦後の昭和二一年、帰国して京都大学大学院特別研究生となられ、昭和二五年、神戸大学文学部助教、昭和二九年、京都大学文学部助教、昭和三六年、文学博士、昭和四一年、同教授となり、昭和五三年、定年によりご退官、京都大学名誉教授とられた。その後は、引

き続き仏教大学教授に就任され、昭和六〇年、これを退任されたが、仏教大学では、その後も嘱託教授、非常勤講師として平成七年まで講義を担当された。なお、この間、京都大学では、評議員を経て、昭和四八年、文学部長を勤められた。また昭和四四年には日本学士院賞、平成九年には大同生命地域研究賞を受賞され、さらに昭和六二年、勲二等瑞宝賞の叙勲を受けられた。

先生がチベット史研究の分野で、国際的に知られた碩学であることは、いまここにあらためて述べるまでもないであろう。先生は羽田亨先生の最後の、最もお若い門下生として、羽田先生を終生敬慕されていた。先生ご自身のお言葉によれば、先生がチベット史を研究テーマに選ばれたのは、羽田先生のお弟子である先輩たちが内陸アジア研究の分野ですでに満蒙史や中央アジア史を研究テーマに選んでいたもので、ただ一つ残されていたチベット史を選ばれたのだという。おそらくそうであったであろう。しかし、たとえ一つだけ残っていても、チベット史を自分の研究テーマに選ぶ人は今も昔も少ない。現に、羽田先生の門下に綺羅星の如く並んだ先生の先輩たちは誰一人としてチベット史を選ばなかったし、また先生の弟子たちも同様であった。先生の『古代チベット史研究上』の「序」は、チベットの自然の厳しさとそこに暮らす人々の過酷なまでの生活を描写したフォスコ・マライニの記述で

始まる。先生は、チベット史研究も、チベットの自然と同じようにきわめて厳しいものであり、「遂には救われがたい状態に立到る」可能性もあることに、当初から気づいておられたという。それでも先生はこの困難な路を選ばれた。先生とチベット史研究との運命的ともいべき結びつきを思わずにはいられない。

先生はお若い頃から、ベートーベンがその生涯に九つの優れた交響曲を残したように、ご自分も「売れない九つの書物」を残したいと考えておられたという。売れない本とは純学術的な書物の意味であろう。実に壮大ともいべきお考えである。事実、先生は、生涯にわたって、新しい独創的な研究のみを追究され、遂に一般向けの書物は一冊も残されなかった。学問の進展にのみ関心を持つ真の研究者であった先生には、そのような書物を書く時間的余裕も、またそのお気持ちもなかったであろう。

先生はこの壮大な計画に沿って、チベット史の分野で、まず吐蕃王国史の再構成に見事に成功した『古代チベット史研究上下』を著された。この二冊は日本のチベット史研究の水準を一挙に国際的水準にまで高めたまさに画期的な著作である。次に、唐より吐蕃に到る行程路を、清朝時代の地図なども駆使して解明した『チベット歴史地理研究』を著された。これは、羽田亨先生と共に先生の師であった宮崎市定先生の「天下の大道は昔から変わ

ることがない」といういわば定理をご自身の研究に適用された著作である。この書物に対して、昭和五四年、日本学士院賞が与えられた。この書物でのご受賞は、先生にはまったく予想外の出来事であったようで、先生にはなかなか実感が湧かなかったというが、授賞式などで天皇陛下の御前にでたとき、先生にもはじめて「有難い」という想いが湧いたという。さらに先生は、吐蕃王国崩壊後のチベット情勢を検討した『中世チベット史研究』を著された。古代の研究が一段落すると、先生はすぐに中世の研究に進まれたのである。先生はよく、歴史家は通史の執筆を目指さなければならぬといっておられたが、古代史に続いて中世史を上梓されたのは、先生のその思いの証といえる。中世チベット史関係では、この他に、チベット語史料の訳注『フウラン・テプテル―チベット年代記』があり、また『明実録』からチベット関係の記事を抽出された『明代西藏史料―明実録抄』もある。以上のチベット史関係の専門書のみで、先生のご著作はすでに六冊を数える。これに加えて、先生は羽田亨先生のお仕事を継承して、『五体清文鑑訳解』上、下を完成された。『五体清文鑑』は、清朝時代に作られた満・蔵・蒙・回・漢の五カ国語の対訳辞書である。さらに先生は、近年、『中国古代史論考』を出版された。遊牧民族が中国史の展開に果たした重要な役割を古代について検討しよう

とされた意欲的な著作である。これらの三冊を加えると、先生は生涯に確かに九冊の学術書を残された。先生はそれのお若いころからの壮大なご計画を完全に達成されて、彼岸へと旅立たれたのである。研究者として実に見事なご生涯という他はない。

先生の学問は、チベット語、漢語等の諸史料の記述をあくまでも重んじ、根拠の乏しいことは決していわれない、実証的かつ本格的なものであった。これは羽田亨先生の偉大な学風を正しく継承されたものともいえる。先生のお教えを受けた私達後進の任務は、先生の研究者としての厳しい姿勢と先生のこの素晴らしい学問を少しでも継承・発展させていくことであろう。

なおここでは先生の偉大な研究者としての側面のみについて述べたが、先生は同時に、優れた教育者であり、また、お話し好きの実に魅力的な方であった。先生には女性のファンも多く、先生と瀬戸内寂聴師との北京留学時以来の六〇年を越える長いご交友についても知る人は多い。ただこのような点については、他誌の先生の追悼文でもすでに少し触れたので、ここではすべて省略した。

さらに、先生の御経歴や御研究については、先生が仏教大学教授を退任されるに当たり祝賀会で配布された「謝恩―チベット史研究の回顧」（私家版、昭和六〇年）と先生を囲む座談会の記録

である「学問の思い出―佐藤長博士を囲んで―」（『東方学』一〇七、平成一六年）が参考になることを付記したい。

先生が御存命であったなら、現在のチベットをめぐる騒乱について、どのようにいわれたであろうか。もはやそれをおうかがいすることもできないのである。今はただ、懐かしい先生の面影を偲びつつ、先生のご冥福を衷心からお祈りするのみである。

（間野英二）